

# 明石秋室先生

山 本 保

(会員・佐伯市池船)

昨年八月十一日、佐伯地区文化財調査委員連絡協議会長 富沢泰様宛に、東京都調布市若葉町一―三七―二 豊田弥六氏より一通のお便りが届いた。

拜啓

一面識もない尊台に、御依頼申上ぐる無礼平に御海容願上ます。

実は、先般杵築の元島集氏から、夏期市民大学に御越しになり、明石大助が佐伯あたりでは梅園先生と同格に尊敬されている由、お話されたとの音信に接し、誠に嬉しく存じました。

実は老生、

大助の家系に、杵築で生れた最後の生き残りであります。

私は十五才に杵築を去り、大助の事は、殆聞かされず

に過ぎました。老境になって聞き度頃には、兄弟は全部他界して居ました。

昭和四十年頃、何十年振りに墓参に帰着。

杵築誌を求め、目を通しますと、大助は豊田の出身らしいと誌されて居るので、一応家系を調べる気になって、血縁方面を尋ねましたが、見た事もないとの返事でしたが、昨五十九年の一月に前後して、故人の書類の中にあつたと云ふて、コピー入手、不日系譜は差上度と存じて居ますが、それによりますと、

卯右衛門(当孝)の次男で、名は貞、儒治、小郎と記入してあります。

小郎の下に

「佐伯毛利若狭守様(第十代藩主高翰)御家中

明石条左衛門の養子になる」と記入あり。

大助は、私の実父晋次郎の叔父、私の大叔ですが、別紙コピーを見ては、相当奔放の性格の様思はれますし小供の頃、仏像の台座の蓮華の花弁を全部むしり取ったいたずら小僧でもあったらしい。

文化財調査資料の一端にてもと存じ、別紙を御送り申上ます。古文書解読される方がありましたら、御知らせ頂ければ幸と存じます。

只余分な事になりますが、手紙の中に、母堂と云ふ字を見て、それは亡父の母である事、老生の祖母で、来年一月十日で百年忌で、九十三才死去。

老生も九十三才、老生生き延びた埋め合せに、来る九月二十三日に杵築の長昌寺で供養の手配致して居る次第です。

最近になって気付いた事ですが、大助の手紙の日付が九月二十三日、偶然に合致して居ます。

甚だ勝手な御願いですが、明石大助の死亡月日と墓所の菩提寺名と所在地、御承知ならば御教示の程御願申上ます。

ぶし付けの段 平に御海容願上ます。

六〇・八・一一

豊田・富沢両大先輩の御許可も得ないまま、無断で掲載しました段、ご寛容下さい。

#### 豊田家御一族物語

豊田副武は、明治十八年五月二十二日杵築（豊後杵築藩主・能見家・松平中務大輔・三万二千石・譜代大名）の漢学者の家に生まれた。

明治三十八年海軍兵学校卒業、大正六年海軍大学を優等で卒業、大正八年から三年間イギリスに駐在した。

帰国後は、連合艦隊参謀長、海軍省教育局長、軍務局長に就任、昭和十二年第四艦隊司令長官、艦政本部長、昭和十六年大将昇進、呉鎮守府司令長官、次いで軍事参議官。山本五十六大将戦死、古賀峯一大将殉職のあとをうけて、昭和十九年五月連合艦隊司令長官に就任、フィリピンのレイテ沖海戦などで、指揮をとった。

昭和二十年五月、陸軍の梅津美治郎参謀総長（中津市出身）と並んで海軍軍令部総長となり、阿南惟幾陸相（竹田市出身）とともに、最高戦争指導者会議にのぞんだが、ついにポツダム宣言受諾にふみきった。

昭和二十七年「最後の帝國海軍」を出版したが、その

中で「海軍は平和を守るため存在するもので、戦いをす  
るために存在するものではない」と説いている。

本年五月十四日、豊田弥六家御一族の方々（四人）は  
佐伯市教育委員会を訪問した。

明石秋室先生関係資料をコピーにして手渡し、柴田義  
夫教育長、菅淳一社会教育課長、大鶴直己、池田陸生両  
社会教育主事は、一行を養賢寺墓地へ案内した。

（正面）

総持院戒岩良珠大姉

正統院亀峯良鑑居士

慧湛 童女

（向って右側面）

慶応元乙丑十一月二十二日

（向って左側面）

明石大助肅墓

（背面）

総 明治十三年十一月一日

慧 文政十三年七月朔日

一同九名は、墓前にぬかずいて参拝した。

ひきつづいて、船頭町住吉神社境内にある「常夜燈」  
をたずね、台石に刻まれている名奉行明石秋室の漢詩を  
鑑賞した。

いうまでもなく、船頭町河岸が船着き場としてにぎわ  
っていたころ、燈台を兼ねて、船頭たちが崇敬する上久  
部東禅寺の山に祭る金比羅宮のお燈明として、この常夜  
燈に每晚燈火（明かり）をともしていた。

明治二十八年五月、国木田独歩は「豊後の国佐伯」を  
発表した。

漁村島裡の民、物を買ひ、物を買らんとて「城下」に  
用あるもの、皆小舟に乗じて海より此の川をさかのぼ  
り来る。道路の便少なき山村の民、亦た小舟に由りて  
此川（番匠川・堅田川・木立川）の恵を被る。

試みに市街の河岸に至り見んか。

終日茲に小舟がつどひ、色黒き舟子、赤き襟つけたる  
村女、柿を盛りたる籠を携ふる老婆、鱸（ふか）の児  
を繩にて縛り、之れを竹杖にて担ひたる男、「城下」  
の名医の診察を受けんとて、妻に介抱せられつつ、舟  
より上り来り来る色青き若者、薪炭を山の如く積みたる

舟より、鼻歌唄い乍ら一束一束運びつつある男、どみ声あげて、同村の者を呼びかくる赤顔の農夫、孫女を連れたる翁など、己がじしざわめくを見る也。

船頭町、内町のにぎわいをよく把握、その表現力には驚く。

寛政六年（一七九四）関谷儀が諸木植付奉行に就任、向島（太平区）に営林署を創設し、ハゼ苗を育て、山村、農村、漁村の原野に十萬本植えた。その実から蝸蠟を製造して年々収益をあげた。翌年向島に板橋を作り、国益橋（諸木橋）と名づけたが、佐伯藩第一号の橋であった。

天保六年（一八三五）魚市場を六本松河原（万年区）に開設し、百浦の水産物を売買して、巨額の利益を納めた。内町・伏見屋半兵衛、船頭町・日向屋善兵衛を執事とし、佐伯藩が管理した。

徳川時代の船頭町川、内町川は、非常ににぎわいをみせていたことであろう。町方郡方奉行明石秋室が、常夜燈に碑文を作ったことも当然であると、いわねばならぬ。

本年五月十九日 豊田老（九十四歳）より第二信届く。

拜啓 愈々御清祥賀上ます。

陳者御多用の処を、大助に關して資料や御案内を賜り厚く御礼申上ます。

先は右御礼かたがた御邪魔申上げた御迷惑御海容願ひます。

六月十日豊田老より、第三信（写真同封）届く。

梅雨の季節になりました。

益々御健祥の事と慶賀に存上ます。

先般御伺ひした時に撮った写真が出来ましたので御送申上ます。

養賢寺に伺って、明石氏の住所に墓石の復旧方をさせて貰えないかと、問合せて居ます。返事が来ましたら御報告申上ます。

御自愛專一の程を。早々。

六月二十六日豊田老より第四信届く。

拜啓 うとうしい毎日ですが、御健祥の事と存じ上ます。先般住吉神社の常夜燈碑の秋室詩を御知らせ賜

り、厚く御礼申上ます。

さて、明石さんの住所をお寺さんに知らせて頂き、墓石の復元方の了解を伺い、御承諾を得ました。

依って柴田教育長さんに復元の方法等伺ひの上、墓石屋に指図致し度存じます。

尊台よりも、明石さんに慎重に工事する様御伝へ願上  
げます。御迷惑とは存じますが、何卒よろしく御願申  
上ます。

七月下旬豊田老より 第五信届く。

暑中御見舞申上ます。

大助墓石復旧については種々御世話になりました。

厚く御礼申上ます。

明石賢吉氏（佐伯市匠南区）から、大助百年祭記念誌

「明石秋室先生」（昭和四十年十一月二十二日佐伯史  
談会発行）を送って頂きましたが、御手元になければ  
コピーを御送り申上ます。……………

豊田老の御尽力で、墓所は見事に復元された。

五代明石秋室御夫妻・お嬢さんの墓は勿論、

初代権大夫貞雄（条左衛門）御夫妻、二代伝蔵貞烈御夫  
妻、三代寿平貞簡御夫妻、四代条左衛門貞嶋夫人等の墓  
地も立派に改修された。

杵築藩士豊田家より、佐伯（豊後佐伯藩主・毛利高翰  
二万石・外様大名・江戸城柳間詰）の明石家へ養子入り  
そして書物奉行、町方郡方奉行へと昇進した明石大助先  
生は、豊田弥六老のお墓参り、墓所復元・改修に対し、  
いかなる感懐であろうか。

#### 明石秋室年譜

西 暦	年 号	事 項
一八一六	文化一三	中島子玉等を咸宜園に紹介
一八二〇	文政 三	佐伯藩書物奉行となる
一八二八	文政一一	佐伯文庫二万冊幕府に献上
一八三八	天保 九	御郡代・町奉行・公事方就任
一八六五	慶応 元	十一月二二日死去 七十三歳